

入学した時から新しい教科書

里草会顧問 福井正樹

囲炉裏の灰をならして文字を書いていると、祖母が「イロハニホヘト」と書けるか？と問うた。私が書けるといって、その最初の字と最後の字を書いてみろ、という。イトと書くと、それがわしの名前だ、と言った。「おばあちゃんにも名前があるのだ」と新鮮な驚きを感じた。その後おばさんたちの世間の噂話の中で「おイトさん」というのが祖母のことだと分かるようになった。

祖母は小学校ができた時、学校からも誘いがあった、行きたかった。家が山奥で遠かったので通うのが可哀そうだということと、妹のお守をさせるので、父親が行かせてくれなかったと、悔しそうに話していた。学校に行かない子も多かったし、子供をおぶって行く子や、親が忙しくなると小さな子を学校に居る上の子に預けてゆくこともある。

しかし祖母は賢い人で、記憶力も良くて、日常生活で不自由している様子はなかった。行商人からコメやアズキの物々交換の取引も、暦通りの行事日程も、農作業やわら細工なども当然のようにこなしていた。祖父は地主の次男だから、当時の尋常小学校の4年間を通ったらしいが、当時は読み書きができなくても、不自由することはなかった。

私は小学校に行くまでに、文字の読み書きはできた。田舎に疎開するまでは、母が代書の仕事をしている横に居て、折々に読み書きを教えられ、子供用の本など与えられていた。小学校の入学式は、何回も延ばされて5月末になっていたと思う。入学式に行く日、祖母は桑を摘んでいる。私が早く行こうとせかせても、まだ早いと忙しく働き、それでも時間にはちゃんと学校に着いた。式の後教室に入って、教科書を先生が示し、「読める人？」と聞いた。読める自信があったのに私は全く分からない。私と同じように疎開していた先生の子供が一人手をあげて「こくご」と言った。

私たちが入学した年から、使用する教科書の文字がひらがなに替わってしまったのだ。カタカナは習わなかったもので、5年生になって教科書に「シグナル」とカタカナが用いられていたが、読めない子が多かった。この使用文字の変更は、私たちの文化的な感覚の形成に大きな変化をもたらしたと思う。それまであった子供向けの本は、みなカタカナだった。私が持って行った「キンダーブック」という子供向けの本も、暗記するほど読んでいたが、古臭い時代遅れのものに見えてきた。「センチノヘイタイサン」の話も、ずっと過去の話で、便所を連想した。(せんちは大便所の方言)

図書室の本は片仮名漢字混じりで、古臭く貸し出しもなかった。各家庭の本も、忠臣蔵など昔の読み物で我々には時代遅れと感じたし、敢えて読もうという気も湧かなかった。だから我々の時から、教育内容も教科書の内容も新しい戦後民主主義の精神に、替わったとあってよい。

だが山奥の辺境の村に、新しい戦後の社会感覚や規範が浸透するには、長い年月が必要だった。人権の尊重や男女平等など、価値観や生活感覚まで変化するには、恐ろしいほど

の年月を経なければならぬものなのだ。ましてラジオや新聞などの普及も十分ではなく、紙そのものがなくて、情報伝達も謄写印刷などに頼らないと、個人には到達しない。この時代にもっとも戸惑ったのが、教師たちだ。それまで軍国主義的に強権をもって子供を型にはめてきた。教師に従わない子に、皮のスリッパを脱いで、それで頬を張り飛ばしていたが、戦後は体罰が禁止された。

自由平等、民主主義、自律や人権、まして自主性の尊重など、教師自身が感受性を持っていないのである。しかも教育方法を替えろと言われても、どう変えればいいのかわかっていない。古い体制や体質がどんどん禁止・放棄される中で、新しく指導すべき理念が欠如している。学芸会の劇は「勸進帳」や「舌切り雀」だし、生徒にせがまれて話をするのは、古事記の国つくりの話や、乃木将軍や日露戦争の日本海海戦だ。自分たちが受けてきた太平洋戦争や天皇制につながる教育や規範は否定されている。しかし彼らの頭の中には滅私奉公の道德観念しか入っていないのである。一億総ざんげと言われて、これまでのことが間違っていたとされても、それに代わる価値観が得られていない。

男尊女卑や村の秩序も倫理感や差別も、日常の思考や生活感覚はかんたんに変わらない。体罰禁止で「自由」を尊重せよというのだから、生徒を放任して、自分の責任になったり非難されたりすることを避けるのが精いっぱいだった。

4年生になった時、大阪の学芸大学を1年休学して帰郷し、代用教員として我々を担当してくれた先生がいた。親が学資を続けられないので、一年実家に戻って稼げと言われたそうだ。この先生は我々とそんなに年が違わないし、後に仲良くなった高校の同級生は、彼の弟で私の名前も知っていた。我々への接し方も、弟と話すのに近かったのだろう。他の先生と感覚が全く違う。

村のこれまでの家柄や秩序によって生徒を評価しないし、先入観も無く、差別せずに客観的で平等に扱った。映画「聞けわたつみの声」などを見て自分が感動したら、その感激を皆に話してくれた。スポーツも先頭に立って野山を駆け回る。図画の時間に先生の顔を描いた。貼り出されたのはみな、顔中橙色のクレヨンでにきびをちりばめていた。

学芸会の演劇も繰り返されてきた古い勸善懲悪やとんち話ではなく、時代の変化を織り込んだユーモアのある新しいものを探してきた。朝鮮戦争だったか共産中国だったかをクラス討論しようとしたが、これは校長から止められたそうだ。「鐘の鳴る丘」の紙芝居を真っ先に読んでくれた。

ベテランの先生が生徒を型どりに指導するのに対して、この先生のおかげで私たちは全く自由な発想で話し合いをするようになった。戦後の変化を大学で新しく感じ取ったまま、私たちにそれを持ち込んだのだ。この1年は先生にとってもすごく印象に残り、私たちもまったく新しい世界を垣間見たのだった。

数十年たって先生が大阪に出張の時、京阪神に居る卒業生と夕食をすることになった。待ち合わせ場所を聞くと「曾根崎警察署」と言う。学生の頃梅田周辺は焼け焦げた廃墟で、曾根崎警察だけが夕暮れに赤々と灯がついていたのだそうだ。